

# 真木和泉守論

(一)

折本龍則

## 王政復古の立役者

これから真木和泉守について書かうと思ひます。真木和泉守は、有馬氏久留米藩の出ですが、区々たる藩意識を超越して天下に活動し、吉田松陰先生亡き後、長州藩を率ゐた桂小五郎や高杉晋作、久坂玄瑞などの松陰門下にとつての実質的な思想的指導者となつたのみならず、幕末全国に雲霞の如く沸き起つた勤王の志士たちに親征討幕による王政復古といふ明確な運動の目標とそのための具体的な方策を示しました。そして自ら身を挺し尊皇討幕の兵を率ゐて戦陣に斃れたのです。そんな和泉守について私が書きたいと思ったのは以下の理由によります。

第一に、和泉守が明治維新に果たされた功績は顕著ですが、その割に彼について書かれたものが少なく正當に評価されてゐないと思ふからです。明治維新的本義は、保元平治の乱以

降七百年続いた武家專制を打破して天皇親政を恢復することにありました。そのことは明治元年三月十四日に渙發された「國威宣撫の宸翰（億兆安撫國威宣揚の御宸翰）」において明治天皇が御親政に対する強い思召しを抱かれてゐたことにも明確に示されてゐます。この宸翰では、形ばかりの尊皇を戒めて臣下の諫言を求め、天皇親政を實質化することの必要が懇々と説諭されてゐるのです。もつとも、この宸翰を起草したのは木戸孝允だとする意見もありますが、もしさうだとしても、逆になぜ木戸がそのやうなことを書いたのかの方が気になります。

平成三十年、時の安倍内閣は「明治百五十年」事業を催しましたが、「明治維新百五十年」ではなく敢へて「明治百五十年」と銘打つたことにも示唆される様に、その内実は明治の本質を近代化や文明開化として捉へ、地方における殖産興業、若者や女性の海外留学、お雇ひ外国人の活躍といった側面を切り出して強調し、「地方創生」や「働き方改革（女性の労働参加促進等）」、「グローバル化」を推し進める政府

にとつて都合の良い歴史解釈で明治といふ時代を曲解し、歴史の実像を歪めるものでした。しかし明治維新的本義は、文

明開化でも近代化でもなく、天皇親政の恢復にこそあつたのであり、そのことは「王政復古の大号令」において「諸事神武創業之始ニ原キ」とあり、維新改革の理想が西欧市民革命のやうな過去との断絶ではなく天皇親政が敷かれた神武創業への回帰に求められたことにも象徴的に示されてゐるのです。

実は、当初明治維新的目標は建武中興に置かれてをりましたが、後に、岩倉具視や玉松操の建言によつて神武建国に改められたと言はれています。しかし、平泉澄先生は、この神

武建国に立ち返るべしとの建言は、真木和泉守によるものだと述べられてゐます。たしかに、和泉守が朝廷に建議した『經緯愚説』には「（これまでの朝廷は）万端旧例古格を金科玉条の如くなし來たりぬ。それも実の古昔の例格ならば宜しかるべきれど奈良にものぼらぬ近古の事なり。然らば此際に於ては、何事も打被り、遠く古に立回り、天智天皇以上神

武天皇神代の例をのみとり行ひ給ふ様にあらまほしき事也。」とあり、「神武天皇神代の例」が志向されてをります。この『經緯愚説』が起草されたのは日米修好通商条約が無勅許調印された安政五（一八五八）年であり、同じ年に吉田松陰先生が大原重徳に奉つた『機密』『時勢論』と共に討幕論の嚆矢とされます。また、平泉先生によると、明治四年の廢藩置県も和泉守の首唱によるものであり、「凡そ明治維新的偉大なる

改革の殆ど全部は真木和泉守の方寸より出で來たもの」とまで述べられてゐます（『先哲を仰ぐ』「真木和泉守」）。

このやうに、明治維新における王政復古に顕著な功績を残された和泉守ですが、維新の本義が戦後教育のなかで隠蔽されるにつれ、王政復古の最大の立役者である和泉守もまた歴史の日陰に埋没してゐるかの感があります。そこで本稿では和泉守の功績に光を当て正當な評価を取り戻したいといふのが執筆の第一の動機です。

## 和泉守と崎門学

第二の理由は、私が予てより崎門学といふ學問を研究してゐるためです。崎門学は、江戸時代前期の儒者、神道家である山崎闇齋によつて創始された學問であり、朱子学的な窮理の論によつて君臣内外の名分を正し、尊皇斥霸の大義を唱へたことから、幕末維新に至る尊皇討幕運動の思想的原動力になりました。実は、和泉守の王政復古思想、天皇親政論がこの崎門学の影響を受けてゐるのであります。とはいへ、和泉守は久留米水天宮の社家に生まれてゐるので当然に神道を修め、国學や和歌、儒学など和漢の學に通じ、特に久留米水戸学派である「天保学派」の領袖として頭角を現すほど水戸学の強い影響を受けてゐます。したがつて彼の思想が取り立てて崎門学の影響下にあるとは言ひ切れませんが、神道も国學も何れも大勢隨順の傾向がある上に、水戸学も我が国の國体を明

らかにし内外の別を正したことから尊皇攘夷の気風を醸成した功績は大きいですが、水戸も所詮は徳川の親藩であり、飽くまで「尊皇敬幕」ないしは「尊皇佐幕」による公武合体論の域を出でませんでした。それでも和泉守が明確に「尊皇討幕」の思想を固め得たのは、尊皇斥霸の大義を闡明する崎門学の影響が大きいと思はれるのです。

先に安政五年における和泉守の『経緯愚説』が松陰先生『時勢論』と並んで討幕論の嚆矢だと述べましたが、和泉守は既に十二年前の弘化三(一八四六)年に久留米藩主有馬頼永に奉つた『敢言草稿』のなかで王政復古を説いており、彼の討幕論は更に遡ります。しかし一方の松陰先生が討幕論に転じたのも、安政一(一八五五)年に野山獄に幽囚中であつた先生の下を訪れた勤皇僧、宇都宮黙霖が山県大弐の『柳子新論』を読むやうに勧めたのがきっかけとされてゐます。この『柳子新論』も尊皇討幕を説いた書であり、著者の山県大弐は山崎閑斎の高弟である三宅尚斎の門人、加々美鶴鵠に教へを受けたことから崎門の学統に属し、近世勤皇運動の魁である明和事件で処刑された人物です。また松陰先生は同じ安政二年に野山獄中で浅見綱斎による尊皇斥霸の書である『靖獻遺言』とその『講義』を読んでおり、恐らくは既にこの頃から討幕の思想を固めてゐたと思はれます。

このやうに、和泉守にしても松陰先生にても、討幕の具体的論策を発表したのは安政五年かもしれません、既にその前

のみならず、政治家、戦略家としても卓抜な手腕を有してゐたのです。

私はこのやうな和泉守の王政復古思想と政策、そしてそれを実現するための戦略が、現代の日本に重要な意味を持つと考へます。それは戦後体制のもとで閉塞し呻吟する目下の我が国はいまこそ王政復古が必要だと思ふからです。今般の武漢肺炎への対応を巡つて、国家意思を決定出来ない体制の矛盾が露呈しましたが、それは何も今回に始まつたことではなく、「主権在民」や「象徴天皇制」を規定した戦後憲法体制の下で、我が国は何ら明確な国家意思を持たず、國体の本義に關する国家の根本的な問題には一切目をつぶつて目先の経済成長を追ひ求めてきました。その結果、飽くなき対米従属性とグローバル経済への追従に陥り、伝統共同体は破壊され農村は荒廃し、貧富の格差は拡大し、国民は路頭に迷つてをります。かうしたなかで、我々は、今一度君臣内外の名分を正し、王政復古を成し遂げて国家意思の所在を明示し、以て維新改革を断行せねばなりません。その上で、和泉守が示した王政復古思想とその為の具体的論策は極めて重要な参考になると思ふのです。

以上に述べた三つの理由により、これから真木和泉守の思想と行動を見て行かうと思ひますが、その際私は①和泉守の王政復古思想と崎門学との関り②水戸学が和泉守に与へた影響③和泉守の楠公崇拜について④和泉守の経緯と行動、とい

ふ視点で論じようと思ひます。①については上述した通りですが、特に彼が生まれ育つた家庭や久留米といふ土地柄が和泉守の思想形成にどのやうな影響を与へたのかといふことも併せて論じたいと思ひます。次に②ですが、和泉守は弘化元(一八四四)年水戸に遊学して会沢正志斎と会見し、久留米水戸学派である天保学派の領袖となるほど水戸学から強い影響を受けてゐます。そこで彼が会沢正志斎の『新論』等水戸学の思想からどのやうな影響を受けたのか考察します。次に③ですが、和泉守は「楠公」とも称されました。和泉守として知られ、弘化四年ごろから毎年楠公の命日である旧暦五月二十五日に楠公祭を続けました。また楠公同様に一族勤皇を体現したことから「今楠公」とも称されました。和泉守の遺書ともされる『何傷錄』(文久元年)の冒頭は有名な『楠子論』が掲げられ、我が國臣子の道が説かれてをります。そこで楠公が和泉守の思想と行動に与へた影響について考察します。そして④ですが、和泉守が内外の情勢に通じ王政復古の具体的経緯と論策を有したこと述べましたが、彼は久留米や長州の藩主や三条、野宮等の堂上公家に対して膨大な数の建議を上書してゐます。そこでこれらの建議を通して和泉守の経緯を明らかにし、水戸村を脱出してから寺田屋の変で挫折し、禁門の変に敗れ、最期は天王山で自決するまでの行動、特に和泉守が幕末維新的政治過程のなかで果たした役割と後世への影響について見ていきたいと思ひます。

から尊皇討幕の思想は固まつてゐたのであり、それはどちらが先かといふ問題ではなく、両者の根底には江戸時代の草創期に淵源する崎門学の思想が影響を及ぼしてゐたと思ふのです。

### 和泉守の今日的意義

第三の理由は、和泉守の王政復古の経緯が現代の我が国日本にも通用すると思ふからです。前述したやうに、和泉守は幕末全国に崛起した志士たちに明確な運動の目標とその為の具体的方策を示しました。しかし戦後の史家は和泉守が偏狭な国粹主義や観念的攘夷論に凝り固まり、その経緯も主として大義名分を正すことに重点が置かれ具体的な方策に乏しかつたと評価する向きが多いです。村上一郎氏は「幕末非命の維新者」のなかで和泉守を「狂夢家」と呼び、洋学を重んじた橋本左内などとは対照的な評価を下してゐます。しかし後述するやうに、和泉守は会沢正志斎や藤田東湖など後期水戸学の影響を受け、武士土着論による「献田の法」や貧農救済策などの具体的論策を有した他、十年にも及ぶ水戸村山梶窩での蟄居生活の間に親戚や弟子達を通して情報を蒐集し、内外の情勢にも精通してゐました。また彼の討幕論も決して机上の空論ではなく、勅命によつて雄藩に出兵させ、攘夷親征の大義名分の下に討幕を断行するといふものであり、現実にそれは朝廷を動かして孝明天皇の大和行幸を殆ど実現させる所まで行きました。このやうに和泉守は思想家として